

学 習 指 導 部 会

研 究 テ ー マ

学習意欲を高めるための指導の在り方について研究

研究テーマ設定の基本的な考え方

21 世紀を担う子どもたちが、変化の激しい社会の中で、豊かな人間性を培い、よりよい社会を構築していこうとするためには、学校において、主体的・意欲的に学習に取り組む姿勢や態度を育てることがより一層必要となってくる。

試行錯誤することのない受け身の学習では、自ら学び、考え、判断しようとする姿勢や態度は育ちにくい。そこで、個の学びを大切にしながら共に学習する中で、一人一人の良さが生きる体験を積み重ねていくが必要になる。そのためには、子どもが主体的に考えたり、判断したり、表現したりする体験を通して、問題をよりよく解決する能力を培い、成就感や達成感を味わわせることが求められる。これらの活動が、自信や学ぶ喜びにつながり、やがて学んだことが豊かな自己実現に向けて生きてはたらく力となるのである。

このような観点から、「学習指導部会」を設定し、個が生きる学習、共に高め合う学習を通して学習意欲の高揚を図る指導の在り方について研究を進めることにする。

主体的に学ぶ態度を育成する家庭科保育領域に関する一考察

—ふれあい育児体験学習をとおして—

義務教育研修課 指導主事 門脇 千里

要 旨

家庭科保育領域の学習では、親の役割の重要性を認識させるために、子どもに対する具体的イメージを持たせ、将来の自分の生き方を考える視点が大切である。これらを学ぶための手だてとして、ふれあい育児体験学習が実施されている。そこで、学習効果を測るためにアンケート調査を実施し、幼児とのふれあいをとおして、どのように子どもに対する具体的イメージをつかんでいくか、また、どのように自分自身を見つめ直し、将来の自分の生き方を考える視点を学んでいくかを考察した。その結果、乳幼児に対する高校生の意識変化と自己変容が明らかになり、乳幼児の発達を学習した後のふれあい育児体験学習の実施がより学習効果を高めることがわかった。

キーワード 高校家庭科保育領域 ふれあい育児体験 学習効果 乳幼児の具体的イメージ
自己理解 生き方

はじめに

平成11年3月告示の学習指導要領で、高等学校家庭科については、男女共同参画社会の推進の観点から、家族・家庭に関する学習において、男女が相互に協力して、家族の一員としての役割を果たし家庭を築くことの重要性について認識させることが求められている。家庭科の学習は男女それぞれが家庭生活の中で、家族の一員としての役割を円滑に果たすために必要な能力と態度を養う上で大変重要な役割を担っている。また、少子化への対応として、乳幼児の発達と保育に関する学習を充実するとともに、子供を産み育てることの意義について考えることが必要である。そのため、幼稚園や保育所等において乳幼児とふれあう機会をもつよう努めることとされている。以上のように、新しい教育課程の家庭科の内容については、少子化への対応、男女共同参画社会の推進の観点など大変重要な改善が図られている。¹⁾

本稿では、学習指導要領改訂の趣旨に沿った家庭科保育領域の学習の観点をふまえ、県政の重点政策でもある「少子・子育て対策」の一つとして、平成10年度より実施している「高校生・ふれあい育児体験」の実践効果とより効果的な実践時期を考察したい。

1 研究目的

高等学校家庭科保育領域では、「乳幼児の保育と親の役割」について理解させ、実践的態度を育てることが目標である。乳幼児に関する学習をとおして、これ

までの自分の育ってきた過程を振り返り、自己理解を深めるとともに、子どもが健全に育つために周りの大人としてあるべき姿を考え、実践できる人間を育てることがねらいとされている。²⁾ そのためにはまず、乳幼児の具体的イメージをつかませることが大切であると考え。また、保育領域での学習対象は、「乳幼児」である。その乳幼児とのふれあいをとおして、生徒自らが、自分の生命を見つめ、自分の生き方³⁾についても考えを深め、さらに将来の自分の生き方をも考える視点を育んでいくのである。

保育領域のめざすべき授業としては、以下の3点が考えられる。

第1に、生徒たちが興味・関心をもつ授業であること。

第2に、生徒たちが乳幼児の理解を深める授業であること。

第3に、生徒たちが乳幼児に関する学習をすることで、自己理解を深め、自分の生き方までも考えることができる授業であること。

そのような授業を実現するための方策として、ふれあい育児体験学習の実践を取り上げ、学習効果をより高めるための実施時期を検討し、その学習効果と問題点を明らかにすることを目的とする。

2 調査概要

(1) 調査時期

平成11年5月～11月である。

(2) 調査対象

本調査における対象生徒は、「高校生・ふれあい育児体験」事業実施校の一つであるA校（全日制・普通科）の2年生8クラス304名である。

(3) 調査方法

ふれあい育児体験学習を各クラス1回ずつ実施した。そのうち3クラスは表1のうち「青年期の生き方と結婚」の学習段階で実施した（このグループは以下、導入時と略す）。また、2クラスは「乳幼児の心身の発達」の学習段階で実施した（以下、発達学習時と略す）。残り3クラスは「子供の人間形成と親の役割」の学習段階で実施した（以下、終了時と略す）。

表1 保育領域の指導計画

内 容	配当時間
青年期の生き方と結婚（導入時）	2時間
母性の健康と生命の誕生	5時間
乳幼児の保育	10時間
新生児の特徴	
乳幼児の心身の発達（発達学習時）	
乳幼児の生活と世話	
家庭保育と集団保育	
子供の人間形成と親の役割（終了時）	3時間

そこで、ふれあい育児体験学習実施にあたって、実施予定の約3日前に事前調査と、実施日の約2日後に事後調査を質問紙法で行った。調査用紙は、記入後その場で回収し、回収率は100%である。

(4) 調査内容

事前調査・事後調査は、表2、表3のとおりである。

表2 家庭科ふれあい育児体験事前アンケート

I 次の質問について、当てはまるところに○をつけて下さい。

①非常にそう思う ②ややそう思う ③どちらでもない
④あまりそう思わない ⑤全くそう思わない

① ② ③ ④ ⑤

1 家庭科のふれあい育児体験はおもしろそうですか |-----|

2 頼まれたら、保育園と遊んでやりたい。……………|-----|

3 園児といっしょに遊んでもつまらないと思う。……|-----|

4 園児がどのように発達するか知りたい。……………|-----|

5 園児が好きである。……………|-----|

II 現在、保育園に対してどんなイメージを持っているか、書いて下さい。

表3 家庭科ふれあい育児体験事後アンケート

I 次の質問について、当てはまるところに○をつけて下さい。

①非常にそう思う ②ややそう思う ③どちらでもない
④あまりそう思わない ⑤全くそう思わない

① ② ③ ④ ⑤

1 家庭科のふれあい育児体験はおもしろかったですか |-----|

2 頼まれたら、保育園と遊んでやりたい。……………|-----|

3 園児といっしょに遊んでもつまらなかった。………|-----|

4 園児がどのように発達するか知ることができた。…|-----|

5 園児が好きである。……………|-----|

II 保育園と遊んで、あなたが発見したことを書いて下さい。

III 保育園と遊んで、あなたが思ったことを書いて下さい。

(5) 調査結果の評価

質問Iの5項目については、思う、どちらでもない、思わないの3段階評価にした後、 χ^2 検定を用いた。質問IIの自由記述内容である事前の園児のイメージ、事後の園児と遊んで発見したこと・思ったことについては、カテゴリーに分類し、ふれあい育児体験学習の効果や問題点を考察した。

3 結果および考察

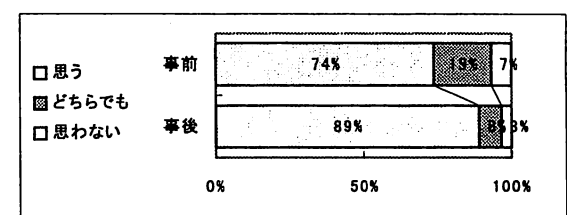
(1) ふれあい育児体験学習実施前後の意識変化

高校生のアンケートの結果、事前・事後の変化の大きい数値を示した項目は、図1に示した「おもしろかった」である。導入時、発達学習時、終了時、合計のいずれの場合も、おもしろいという認識は有意に高くなっている。ふれあい育児体験学習で、園児とともに遊ぶことはすべての学習段階の実施で思った以上におもしろいと感じられたことが明らかになった。

図2に示した「園児といっしょに遊んでもつまらない」の項目については、導入時では有意な差は認められなかったが、発達学習時、終了時、合計では有意差

図1

事前 ふれあい育児体験はおもしろそうですか
事後 ふれあい育児体験はおもしろかったですか



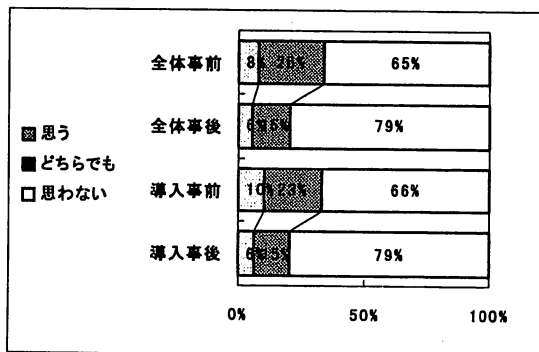
** P < . 0 1 N=304

が明らかとなった。生徒は、園児といっしょに遊んで

図 2

事前 園児と遊んでもつまらないと思う

事後 園児と遊んでもつまらなかった

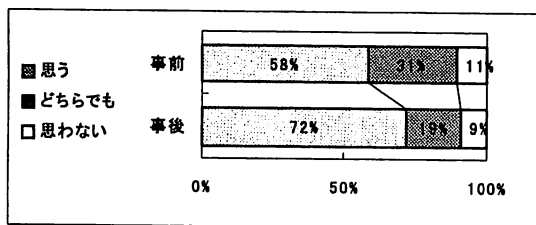


導入時 n s N=115 全体 ** P < .01 N=304

図 3

事前 園児が好きである

事後 園児が好きである

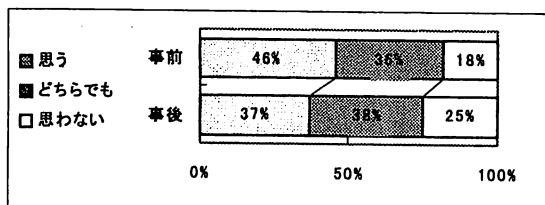


** P < .01 N=304

図 4

事前 園児がどのように発達するか知りたい

事後 園児がどのように発達するか知ることができた

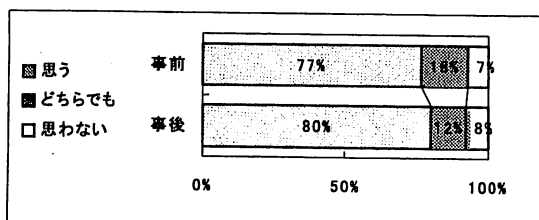


* p < .05 N=304

図 5

事前 頼まれたら園児と遊んでやりたい

事後 頼まれたら園児と遊んでやりたい



n s N=304

もつまらないのではないかと考えていたにもかかわらず、実際に園児といっしょに遊んでみるとつまらないとは思わなくなる傾向が見られる。このことは、乳幼児の心身の発達の学習により生徒が漠然と持った幼児の特徴を、園児といっしょに遊ぶことで具体化させることができたためではないかと考える。このことから、乳幼児の心身の発達についての学習を終えた後に、体験学習を実施するのが、乳幼児の理解をより深めるために有効であることがわかった。

図 3 に示した「園児が好きである」の項目については、合計で有意に高くなっている。

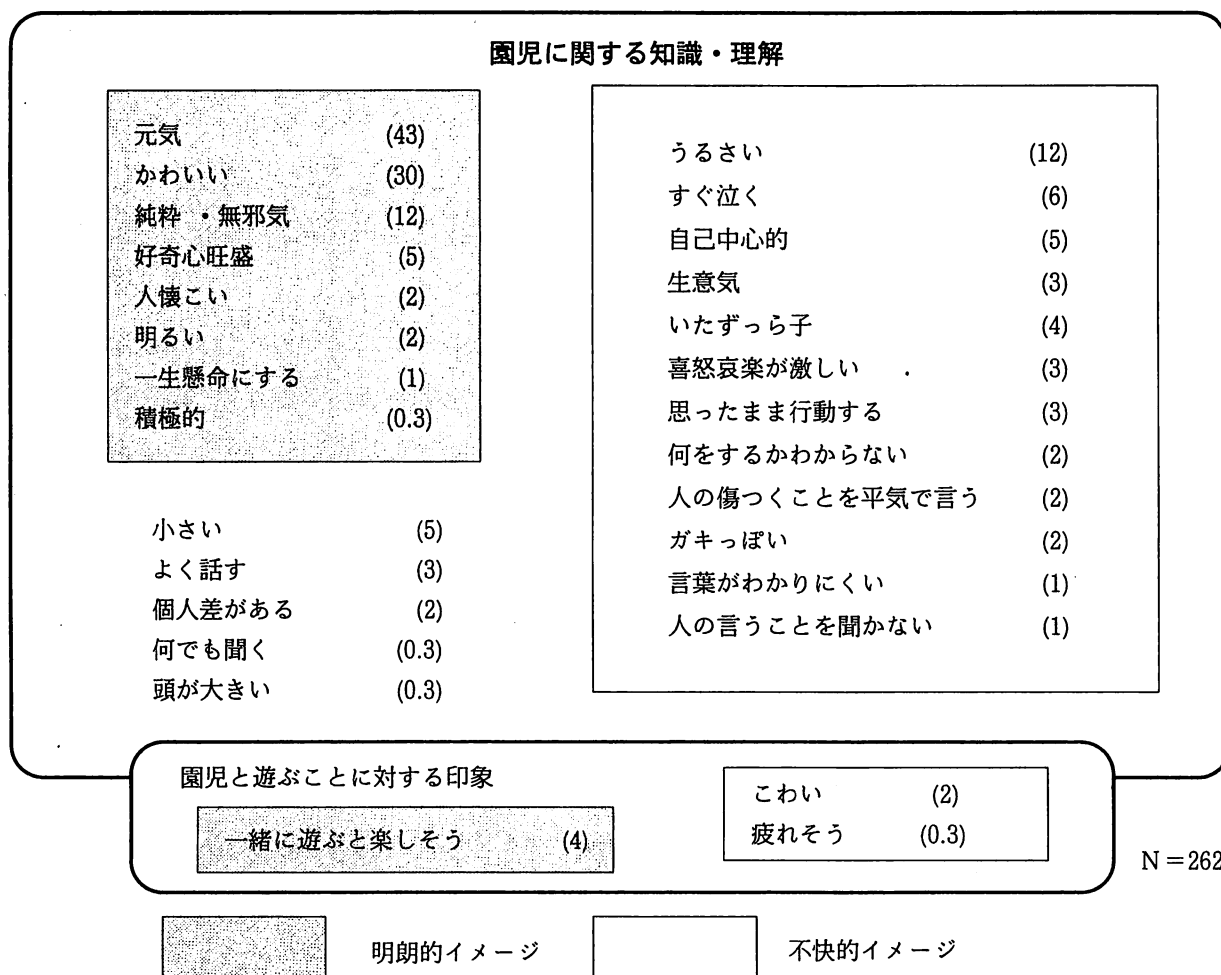
図 4 に示した「園児がどのように発達するか知ることができた」の項目については、事前に「知りたい」と思っていたにもかかわらず、「知ることができなかった」と思う生徒が多いことが明らかになった。これは、昨年度の県下 4 校の調査結果と同様である⁴⁾。また、発達学習時、全合計では有意差が明らかとなった。また、すでに大路・松村が報告している「雑誌に掲載された幼児体験学習の過去の実践事例を検討した結果、保育学習に対する学習意欲が高まること、子どもに対する感情や態度がよくなること、生徒自身が自分の生き方について考えられるようになることなどの学習効果がある」⁵⁾と一致することが認められた。このことは、ふれあい育児体験学習で、園児がどのように発達するかを学ぶことは難しいことと考えられる。

図 5 に示した「頼まれたら園児と遊んでやりたい」の項目については、いずれの場合も有意な差は認められなかった。

以上の結果を総合すると、第 1 に、ふれあい育児体験学習は、生徒たちにとって楽しいものであり、園児を好意的にとらえるようになることがわかった。めざすべき授業の第 1 の視点である保育領域の学習に興味・関心を持つ授業を実現するために、ふれあい育児体験学習は、保育領域の全ての段階で有効であることが明らかになった。第 2 に、幼児の発達の順序性については、理解できにくいことがわかった。第 3 に、めざすべき授業の第 2 の視点である乳幼児の理解を深める授業を実現するためには、乳幼児の心身の発達についての学習を終えた後に、ふれあい育児体験を実施するのが有効であることがわかった。

表2 園児に対してどんなイメージを持っているか

(%)



(2) ふれあい育児体験学習前後の高校生の自己変容

① 園児に対するイメージ

事前アンケートにおける「園児に対する具体的イメージ」の自由記述内容をカテゴリーに分類した(表2)。いずれの学習段階の実施においても、「元気」43%、「かわいい」30%、「純粋・無邪気」12%、「うるさい」12%というイメージを園児に対して持っている生徒が多い。他に、「小さい」「すぐ泣く」「自己中心的」「楽しそう」「生意気」などのイメージを持つ生徒が多くあり、幼児を概念的にとらえていることがうかがえる。そのうち、園児に対する明朗的イメージの「明るい、楽しそう、人懐こい」などの方向であると答えた生徒⁶⁾は49%であった。また、園児に対して不快的なイメージを持つ生徒は33%であった。

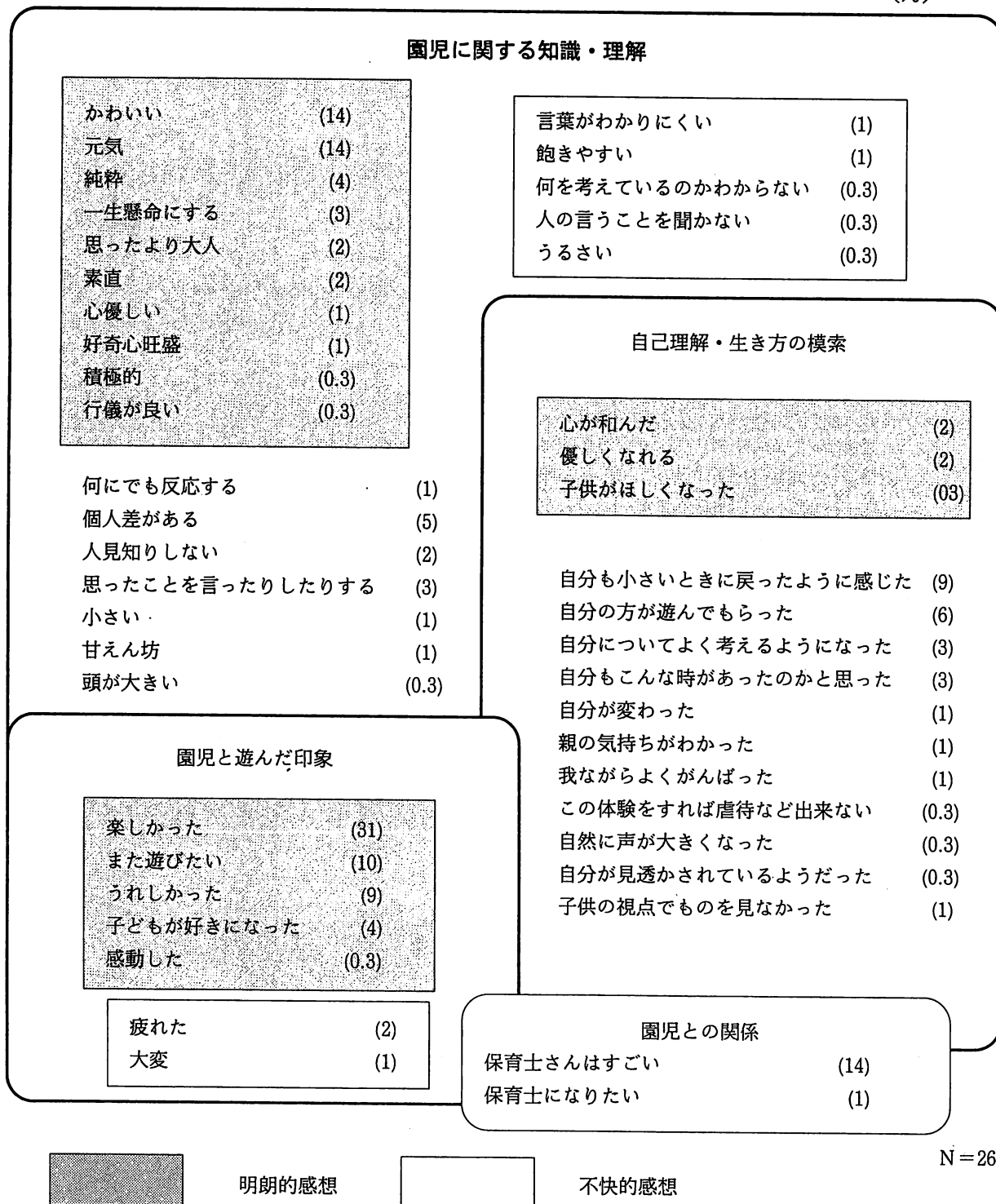
② 園児と遊んで発見したこと

事後アンケートにおける「園児と遊んで発見したこと」の自由記述内容も上記同様、カテゴリーに分類した。それらの特徴を以下に示す。

いずれの学習段階の実施においても、「元気」18%、「大きな声で話す」11%、「好奇心が旺盛である」6%、「個人差がある」6%、「純粋」5%、「人懐こい」5%など、園児と遊んで発見をした生徒が多い。そのほかに「何事も一生懸命にする」「小さいけれど人に対する思いやりやたくましさがある」「発想が豊か」「自分の意志を持っている」「思ったより大人」「自分は子どもが好きであるということ」「姿勢を低くしたら誰でも寄ってきた」などの発見があり、園児のいろいろな行動や言動に気づき、園児に関する具体的な知識・理解を発見している。そして、園児の行動や言動をとおして新たな自分自身の発見に至った生徒も多く見られた。

表3 園児と遊んで思ったこと

(%)



③ 園児と遊んで思ったこと

事後アンケートにおける「園児と遊んで思ったこと」の自由記述内容も上記同様、カテゴリーに分類した(表3)。それらの特徴を以下に示す。

いずれの学習段階においても、「楽しかった」31%、「かわいかった」14%、「元気だった」14%、「またいっしょに遊びたい」10%、「うれしかった」9%と答えた生徒が多かった。いずれの場合も「3歳の子と遊

んでいると自分も幼児に戻ったようで純粋な心になり、とても楽しかった」「自分の言ったことやしたことを信じ、敏感に反応してくれることがうれしかった」などと具体例を上げた感想がほとんどであった。

その他に、「自分も小さいときに戻ったように感じた」「自分の方が遊んでもらった気分である」「自分についてよく考えるようになった」「自分が見透かされた感じがする」などの感想があり、園児を自分と対等

の立場でとらえている様子がうかがえる。またそこから、自分自身を見つめ直し、将来の自分の生き方をも考えることができた生徒も多い。

そして、幼児に対する明朗性因子の「明るい、楽しそう、人懐っこい」などの方向であると答えた生徒は、いずれの場合も64～73%であった。

また、「疲れた」「大変」という感想は、「元気がありすぎて一緒に遊ぶのに疲れた」「手をつないでいてもすぐに手を離してどこかに行ってしまうので大変だった」などであった。このことは、園児の自然な行動であり、問題はないと考えられる。

また、園児に対する不快的なイメージを持つ生徒は、5%であり、事前アンケートと比較してずいぶん減少している。

以上の結果を総合すると、生徒が最初にイメージしていた園児像は、「元気」「かわいい」などと概念的なものであった。しかし、生徒は、生き生きと活動する園児の行動や言動に接することにより、園児に関する知識・理解は、より具体的なものになり、園児を好意的にとらえるようになったと考えられる。また、自分の心を豊かにしてくれた園児に対する興味・関心も大変好意的なものになっている。生徒は自分の園児に対する思い込みから脱却し、園児のありのままの姿から、園児に対する認識を深めている。さらに、園児の行動や言動をとおして自分自身を深く見つめ、現在の自分、将来の自分の生き方をも考えることのできた生徒も多い。

めざすべき授業の第3の視点である自己理解を深め、自分の生き方までも考えることのできる授業を実現するためには、ふれあい育児体験学習はすべての学習段階の実施においても有効であると考えられる。

4 成果と課題

ふれあい育児体験学習において、高校生が、今まで概念的なイメージしか持っていなかった幼児に対しての認識を深めている。それは、一緒に活動するなかで、自分に信頼を寄せる園児たちの言動や行動である。また、園児たちに認められた自分を見つめ直し、自分自身の生き方を考えることができるようになった。これらの実践は、生徒たちが保育領域の学習を主体的に学ぶための手だてであり、生徒たちが自分自身を見つめ

直し、新たな自己発見をする手だてではないかと考える。

そして、乳幼児の理解を深める授業を実現するためには、乳幼児の心身の発達についての学習を終えた後に、ふれあい育児体験を実施するのが有効であることも明らかになった。

しかし、幼児の発達の順序性は理解できにくいことも明らかになった。そのため、カード式学習法⁷⁾などと併用する必要があると考える。

今後、より効果的な実施時期と方法との関係について研究を深めていきたい。

おわりに

「知ることは感じることの半分も重要でない」これはレイチェル・カーソンが、子どもに関わる大人たちに向けた著書「センス・オブ・ワンダー」に記した一節である。このセンス・オブ・ワンダー＝不思議さに目を見はらせる感性⁸⁾、を新鮮に保つことが、主体的に学ぶときのポイントになるのではないかとこの調査をとおして改めて考えさせられた。生きることについて学ぶ家庭科では、多様な生き方・考え方を生徒自らが学び取るということが何よりも重要である。保育領域でのふれあい育児体験学習の実践をとおしてわかってきたことは、生徒自らが、園児に対する認識を深めて、多様な生き方・考え方を学び取り、新たな自分を発見していることである。このことは、保育領域の学習の魅力を倍増するものであり、非常に有効な実践であった。

最後に、本調査に対し、ご協力いただいた方々に厚くお礼申し上げます。

引用および参考文献

- 1) 「産業教育10号」海文堂出版 (1999)
- 2) 文部省『高等学校学習指導要領解説 家庭編』実教出版 (1989)
- 3) 牧野カツコ『家庭科ワークブック』国土社 (1996)
- 4) 「研究のまとめ」兵庫県立教育研修所 (1999)
- 5) 「日本家庭科教育学会誌 41-1, 55-62」日本家庭科教育学会 (1998)
- 6) 伊藤葉子「家庭科教育 69-13, 105-113」家政教育社 (1995)
- 7) 「日本家庭科教育学会誌 42-4, 39-45」日本家庭科教育学会 (2000)
- 8) レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』佑学社 (1991)

研究紀要 第111集

発行日／平成12年5月12日

編集発行／兵庫県立教育研修所

所長 乾 征 夫

〒673-1421 兵庫県加東郡社町山国 2006-107

電話 (0795) 42-3100(代)

印刷所／ウニスガ印刷株式会社